

日荷上人

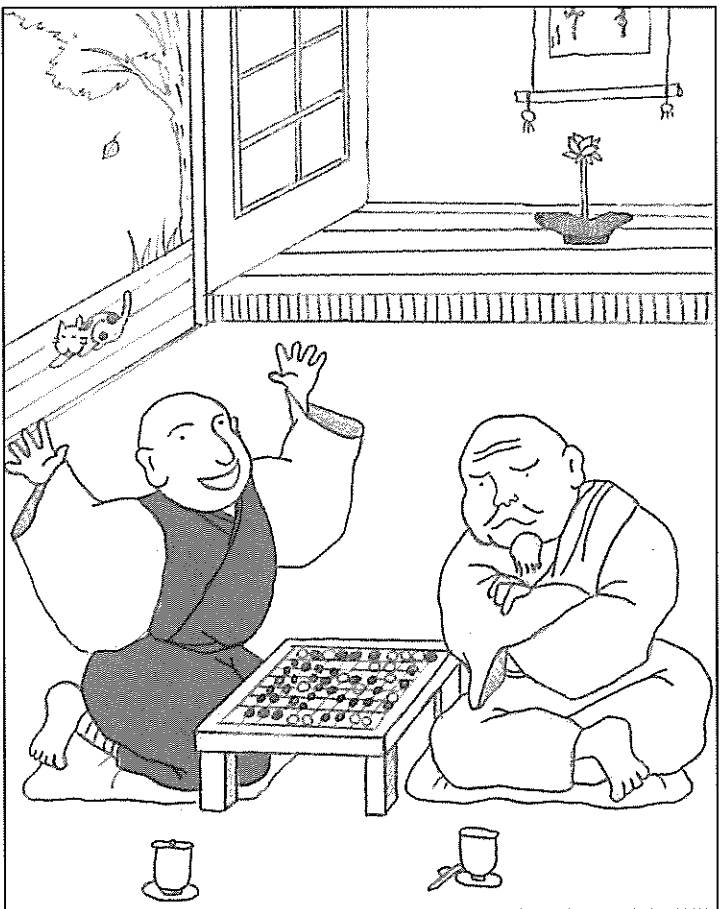
今から650年ほど昔。六浦の上行寺というお寺に、大変力持の妙法という住職がおりました。ある夜、ぐっすり眠っていた妙法は不思議な夢をみました。大きな仁王様が現れて「私は称名寺の仁王です。身延山の守神になりたい。お前のその力で私を身延山のお寺まで運んでくれまいか」と言うのです。

あまりに真剣なその様子に、妙法はさっそく称名寺の住職に、仁王様をゆずってくれるよう頼みましたが、「大事な称名寺の宝をゆずるなんてとんでもない」と断られてしまいました。その後も夢の中に現れては「身延山に行きたい」という仁王様の願いに、妙法は称名寺の住職が碁がとても好きなことを思い出し、いいことを考えました。

そして何日かすぎたある日、妙法は称名寺に住職を訪れ、碁の勝負を申し込みました。二人とも夢中になって、お昼前から始めた碁はなかなか勝負がつかず日も暮れて、妙法が勝った時にはもう夜があけていました。

実はその日の勝負には一つの約束がありました。それは妙法が勝ったら、称名寺の仁王は妙法のもの、反対に負けたら何でもするということでした。でもその時、早く大好きな碁を始めたくてうずうずしていた称名寺の住職は、その言葉をうっかり聞き逃していました。

だから勝った妙法が「約束どおり仁王様を頂いて帰ります」といった時にはびっくりしてしまいました。



「お寺の大事な仁王様を渡すなんてとんでもない」と断り、心の中では……あんなに重い仁王様を持つて帰れるはずがない……とも思っていました。

妙法はその日は帰りましたが、ある夜、称名寺に行き、仁王様を縄で背負うと寺

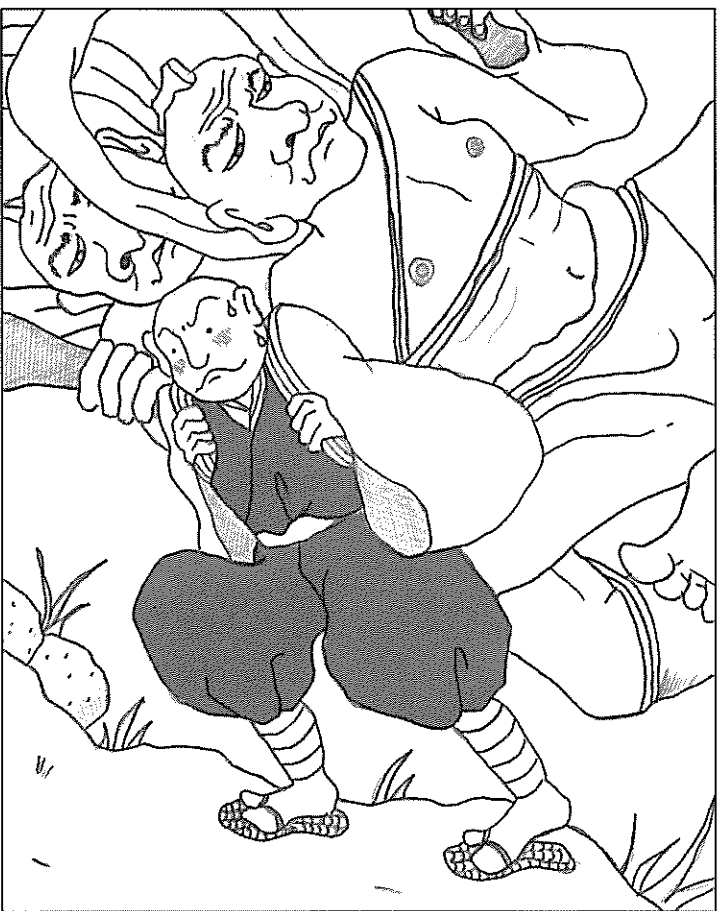
から運びだしてしまいました。重たい仁王様を二つも背負い、三日間寝ないで山道を歩き続け、身延山の立派なお寺につきましました。

お寺の住職は、大きな仁王様を背負い現れた、怪力の妙法に大変驚きましたが「この仁王様をお寺にぜひ納めてください」という妙法の言葉と立派な仁王様に大変喜びました。

この住職は身分の高いお坊さんでしたので、そのお礼にと妙法に『日荷上人』という名前を与えました。住職である以上貴い名前を頂くのは名誉なことでしたので、妙法はとても喜びました。

帰りは足取りも軽く身延山の林を歩いていきますと、ふと傍らに今まで見たこともない木を見つけ、三本持ち帰りました。それは「カヤ」の木だと分かり、自分の家、杉田の妙法寺、六浦の上行寺にそれぞれ植え、大切に育てました。

やがて時がたち、今も力持ちの妙法によく似たガツチリした形のカヤの木は、足の丈夫だった妙法にちなみ「わらじ」と共に足の守神として、上行寺の庭に昔を語るように立っています。その後横浜市の名木の指定も受けましたが、このカヤの木が、最高の「碁盤」を作ることを見なさんは知っていましたか？



文 氏家 總子（ふさこ）

絵 池田 利恵